

なぜ世界は持続可能にならないのか

ながれ

荒田 鉄二 (あらた てつじ/公立鳥取環境大学 環境学部 環境学科 教授)

「なぜ環境への取組が進まないのか」というのが今月の特集のテーマ。その答えは、これまでに何度も書かせていただいたように、「成長する経済」という枠組みの中でやっているからだと思います。今年の2月に閣議決定された「第7次エネルギー基本計画」においても、「日本経済が成長機会を失うことは、決してあってはならない。」とされていて、経済成長が大前提となっています。「持続可能な開発」がいつの間にか「持続可能な経済成長」になってしまったのですが、有限の世界で無限の経済成長を続けることは原理的に不可能です¹。

それにも拘わらず、なぜ不可能なことを目指す努力が続けられてしまうのでしょうか。そこには幾つかの理由があると思います。思いつくままに書くと、一つ目は「言葉と現実の混同」です。モノは何かの役に立つという使用価値を持っています。その一方で、あるモノが他のモノとの比較で持つ価値は、交換価値としてのお金（貨幣）で示すことが出来ます。モノの価値を抽象化して示すお金は、複利計算によって無限に増殖可能です。ここから人々（経済学者）は経済も無限に成長できると考えてしまったのですが、物質的基盤を持たない経済はあり得ません。DXで「経済の脱物質化」と言われたことがありましたが、「第7次エネルギー基本計画」では、DXの進展に伴うインターネット・サーバのための電力需要の増加を見込んでいます。

コンピュータ上でお金が無限に増えていても、お金によって価値が測られているモノやサービスは物質的基盤を持っており、有限の世界でそれが無限に増えることはあり得ま

せん。無限に成長する経済という幻想は、抽象的なレベルで成り立つことは、現実のレベルでも成り立つという勘違いに基づいているのだと思います²。「白い黒」というのも言葉（概念）の上では可能ですが、現実世界に「白い黒」は存在しません。これと同様に、「持続可能な経済成長」も概念としては存在可能で、それについて議論することも出来ますが、だからと言って、それが現実世界で実現可能なわけではありません。

それでは、何故いつまでもこのような幻想が維持されてしまうのでしょうか。そこには社会への適応あるいは保身という面があるように思います。生物学的進化から文化的進化へと移行した人類は、周囲の自然環境に集団として文化的に適応し、個々の人間は自分が生まれた社会という環境に適応します。人間は自分が生まれた社会の環境に適応しなければ生きていくことが出来ません。そうすると、「無限の経済成長が可能」という前提がまかり通っている社会においては、個々の人間にそれを受け入れさせる圧力が働くこととなります。第二次世界大戦中の日本人の多くが「欲しがりません、勝つまでは」というスローガンのもとに戦争に協力していました。しかし、当時の日本と米国の工業生産力には10倍程度の差があり、日本が米国と長期戦を戦って勝てる可能性はそもそもありませんでした³。それでも「勝ち目はないので、そろそろ止めよう」と表立って言う人はなく、広島と長崎に原爆が落ちるまで戦争は続きました。これは社会に適応せざるを得ない個々の日本人にとって、戦争に協力することが生存のための合理的な選択だったからでしょ

う。同じことは「就職が決まって髪を切った」学生運動世代にも、今の学生たちにも言えると思います。「有限の世界で無限の経済成長は不可能」と考えている学生がいたとしても、そのことを就職の面接で言うのは得策ではなく、就職後も「無限の経済成長が可能」という前提を消極的にではあれ受け入れて仕事をしていくことでしょう。その結果として、社会はいつまで経っても変わらないことになります。

社会が変わらないもう一つの理由として、「人間は自分自身の直接的な痛みからしか学べない⁴」ということもあるように思います。太平洋の島嶼国では海面上昇によって国土が消滅するという深刻な被害が起きています。しかし、日本に暮らしている私たちから見れば他人事であり、自分が困るわけではありません。これは、他人の虫歯の痛みは幾らでも我慢ができるのと同じです。人間には自分に直接的な影響が及ぶまで行動しない傾向があるようですが、温暖化などの地球環境問題の場合には、先進国に暮らす私たち一人一人が直接的な影響を感じるようになった時には既に手遅れです。環境問題でも、公害による深刻な健康被害が起きていた時代には、反公害の住民運動が起こり、汚染源の工場を操業停止に追い込んだこともありました。それは当時の人達が公害の直接的な被害を感じていたからでしょう。ここから推測すると、「持続可能な経済成長」という実現不可能な目標を追及しているうちに、気が付いたら手遅れになっていた、というのが最もありそうなシナリオのように思います。

最後に、社会が変わらない最大の理由として、文化における「進化の袋小路⁵」といえるような状況が挙げられます。資本主義はその登場以来、変化を繰り返してきました。例えば、ライバルとしての社会主義が登場する

と、資本主義諸国は社会主義的な要素を取り入れた福祉国家を目指す社会民主主義政策を採るようになり、それで労働者をなだめて社会主義の拡散を食い止めました。その後、冷戦の終焉と共に社会主義圏が崩壊すると、資本主義諸国では組合等の労働者の連帯が堀り崩されて株主利益を最優先する新自由主義政策が採られるようになりました。21世紀に入って、モノを作って売る実体経済でのビジネスの収益率が下がると、資本は金融商品の取引によってお金がお金を生み出すマネーゲームの世界に向かい、今ではそれが世界経済の大きな部分を占めるようになっていきます⁶。このように、無限の成長を必要とするという1点を除いて資本主義は変幻自在であり、社会システム間の競争では無敵と言えます。このため、持続不可能であっても、経済成長が続いている間は誰も資本主義を止めることは出来ません。従って、生き延びたいのであれば、なすべきことは、資本主義の崩壊に備えて「文明の避難場所づくり」を進めておくことだと私は考えています。

(注記)

¹ 私にとっては、無限の経済成長が不可能というのは、私が永遠には生きられないのと同程度に自明です。

² 哲学者のルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、これを「具体性を置き換える誤謬」と言っています。

³ 当時の経済官僚、軍人、経済学者、産業界の人達の中には、このことを知っている人が多数いたはずですが。

⁴ ガザにおける民族浄化と言えるような残虐行為が今日のイスラエル社会で許容されているのも、ホロコーストを直接的に体験した世代がイスラエル社会からいなくなってしまったからだと思います。

⁵ 動物行動学者のコンラート・ローレンツの言葉で、種内競争で有利に働く変化が種の存続にとってはマイナスになる状況を指します。

⁶ これは経済の脱物質化を意味しているわけではないと思います。経済学者のハーマン・デイリーは、いずれ増え続けるお金と有限なモノ(商品)の量が釣り合わなくなり、お金があってもモノが買えない状況がやって来る。その時にはデノミなどによって増えすぎたお金を始末することが必要になるだろう、と言っています。